

## 大学教育学会 課題研究活動報告書 (2020 年度)

提出日 2021 年 3 月 27 日

報告者 深堀聰子

課題研究テーマ	学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じたエキスパート・ジャッジメントの涵養と大学組織の変容
代表者 (所属)	深堀聰子 (九州大学)
メンバー (所属)	深堀聰子 (九州大学), 松下佳代 (京都大学), 伊藤通子 (東京都市大学), 中島英博 (名古屋大学), 佐藤万知 (広島大学), 田中一孝 (桜美林大学), 畑野快 (大阪府立大学), 斎藤有吾 (新潟大学), 長沼祥太郎 (九州大学)
担当理事	松下佳代 (京都大学)
コメンテーター (所属)	濱名篤 (関西国際大学)
実施した活動	<p>本課題研究では、教育のデザインと評価にかかる大学教員の専門性を鍛えることを通して、大学組織はいかに学修者本位の教育への転換を果たし得るのかを明らかにすることを目指す。すなわち、①学修成果アセスメント・ツールの開発・共有・活用支援体制を整備することで、大学教員の「エキスパート・ジャッジメント」はいかに涵養され、②大学組織におけるいかなる条件が整ったとき、大学教員は変容のエージェントとして、「学習システム・パラダイム」への転換を導き得るのか明らかにすることを研究課題としている。</p> <p>2020 年度には、開発したエキスパート・ジャッジメント調査項目の妥当性と活用可能性について検討するとともに、組織変容に注目する背景と組織変容を捉える枠組みを整理した上で、アセスメント・ツールの開発・共有・活用に関する国内外の調査 (コロンビア大学、東京都市大学、九州大学) を実施し、その成果を本学会 2020 年度課題研究集会において報告し、今後の取組を展望した。</p>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大学教育学会 2020 年度課題研究集会課題研究シンポジウムⅢ (2020 年 11 月 29 日@早稲田大学)「学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じたエキスパート・ジャッジメントの涵養と大学組織の変容—実践的研究の成果と課題—」</li> <li>● 大学教育学会誌第 43 巻 1 号 (課題研究シンポジウムⅢ)             <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 深堀聰子「学修者本位の教育への転換の要件-研究枠組みと取組の全体像 (趣旨説明)」</li> <li>◆ 畑野快・斎藤有吾・長沼祥太郎・中島英博「エキスパート・ジャッジメントと組織変容」</li> <li>◆ 佐藤万知「個人, 集団, 組織の相互作用による変容プロセスの一考察—コロンビア大学 <i>Frontiers of Science</i> の事例より—」</li> <li>◆ 斎藤有吾・松下佳代「PEPA によって学生の成長を縦断的に評価する」</li> <li>◆ 伊藤通子・松下佳代・斎藤有吾・中島英博「学習システム・パラダ</li> </ul> </li> </ul>

	<p>イムへの転換における PEPA の有効性—東京都市大学のケーススタディから—</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 深堀聡子・斎藤有吾・田中一孝・長沼祥太郎「Tuning テスト問題バンクの教学マネジメントへの活用」</li> <li>◆ 田中一孝「学習システム・パラダイムの転換に向けて—2020 年度課題研究シンポジウムの総括と展望—」</li> </ul>
残された課題	<p>開発した研究枠組み,「エキスパート・ジャッジメントの涵養」を捉える指標,「学習システム・パラダイムへの転換」を捉える枠組みを援用しながら, 大学教員の変容を基盤とした大学組織の変容に取り組む大学の調査に継続して注力する.</p>